

北海道旅行 8. はるばる来たぜ 函館へ



函館教会で工藤ご夫妻

7月19日(日)の朝、雅子さまの義弟の純さまがお迎えに来て下さり、函館教会に連れて行ってくださいました。ここで、劇的対面を純さまが用意しておられたのです。80年以上前、まだ若かった父は函館で働きながら、教会に通い、そこで恩師、親友を与えられました。父の親友の弟さんの工藤ご夫妻が函館教会員で、会いたいと待っておられました。父は、工藤さんのお母様を、親友の母上というだけでなく、自分の母のように慕い、親しくしていただきました。お母様は我家にも見え、私も可愛がってもらいました。お母様の面影を残す工藤さんと優しい奥様にお会いできて、夢のようでした。ご夫妻は教会に長く仕え、支えてこられた信徒です。若き日の父が通った同じ礼拝堂で、共に礼拝できるとは！

お母様はなかなか信者になる決心がつかない彼に、「私の教育が至らなかったから、私の手を切り落す」と嘆き、本気としか思えない迫力に負け、洗礼を決心したと笑いながら言われました。祈りの人、優しいおばあちゃんと思っていたのに、こんなに激しい方とは…でも、母上を愛し、信頼する工藤さんご夫妻は母上の信仰にならって、今まで穏やかに、愛情深く、誠実に生きてこられたと実感させられました。お二人のような夫婦になりたいと思いました。

午後、純さまご夫妻が函館を案内して下さいました。函館港を見下ろす元町地区には、1860年、ロシア領事館が出来た時からの函館ハリスト正教会、フランス人司祭によるカトリック元町教会、1874年、キリシタン禁令撤廃と同時に、函館教会、函館聖ヨハネ教会が建ちました。この地区には領事館や、外国人居住地、宗教施設がまとまってあり、監視の函館山や、護国神社の下側にあり、まとめて管理したかったようです。開国と開拓の歴史を感じさせる旧函館区公会堂、領事館跡地、富豪の住居跡、倉庫などが坂道に並び、港が一望できます。赤煉瓦倉庫群が並ぶ岸壁の近くに新島襄が21歳の時(1864年)、ここから禁を犯してアメリカへ渡航した記念の碑がありました。



次に William Rennie 先生の記念碑に案内してもらいました。先生は父の尊敬するカナダ人で、函館の公立学校の英語教師として、1906年から、強制退去させられた1941年まで、働かれました。函館教会に通われ、そこで父が出会いました。高潔、清貧、深い信仰の人で、日本の貧しい人々と共に生き、与え尽くされた人生を送られました。父が記念にいただいた扁額には He that dwells in the secret place of the Most High / Shall abide under the shadow of the Almighty. (いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ 詩 91:1)と墨字で書かれています。署名をお願いしたところ、断られたそうです。レニー先生は神の陰に身を置き、それを喜びとしながら、独身で、労働しながら、宣教されました。その額は我家の宝として壁に掛けてありました。父は次女に先生の名前に因み礼子と命名しました。不思議なことにこの日は礼子の誕生日でした。

五稜郭公園を散策しました。設計当時、五稜の美しい全体の形を誰が見ることができたでしょう。今はタワーがありますが。公園の中に箱館奉行所を移築、再建したのがあり、そこにも歴史を感じます。その後、トラピスチヌ修道院を訪ねました。尼僧の世界らしく、非常に清楚で美しい佇まいでした。アイヌと松前藩の戦争、ペリーの来航、キリスト教、戊辰戦争の舞台である函館は、外国との関係の歴史、文化が奥深いと感じました。

純さま、栄子さまご夫妻は函館を愛し、隅々まで詳しくご存じでした。名ガイドとなって下さいました。最後にとびっきり美味しいお寿司をご馳走して下さいました。これは義姉雅子さまご夫妻からの申しつけとのことです。北海道を愛してやまない方々の、ご親切、ご配慮に感謝で一杯です。